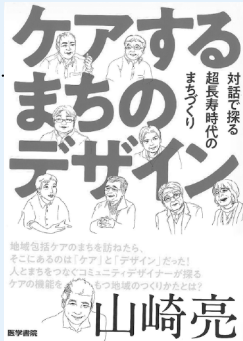


ケアするまちのデザイン 対話で探る超長寿時代のまちづくり

山崎亮=著
本体2,000円+税
医学書院 ☎03-3817-5600



地域包括ケア

——地域共生社会へ変換するケアの真髄

一般財団法人脳神経疾患研究所／看護小規模多機能型居宅介護事業所 在宅看護センター結の学校／
南東北福島訪問看護ステーション結所長 沼崎美津子

もともと地域看護が好きであった身として
病院看護管理から在宅看護を追究しようとし
た時期に、国は「地域包括ケア

システム」の構築に向けて進み
出した。そして、筆者は現在、
看護小規模多機能型居宅介護事

業（看多機）を設立し4年目と
なる。このタイミングで本書「ケ

アするまちのデザイン」に出会
い、著者である山崎亮氏のまち

づくりに対する斬新な取り組み
と発想に驚嘆した。

生きることができる地域づくり

地域で安心して生きることができることは、保健・医療・介護だけのケアでは成立しない。本書の著者である山崎氏は、まちづくりの分野で人と人がつながる仕事として「コミュニティデザイン」に尽力されている。そして、自ら地域包括ケアを超えて地域共生社会づくりに取り組んでいる地域を訪ね、ケアとデザインを融合させるエッセンスを関係者から引き出

した。その地域の習慣や風習を生かしながら、誰がどのタイミングで地域社会を活性化させているのかについて、それぞれの地域を牽引する方々との鼎談から、読み手としては、それぞれに納得させられた。

「できないことを100挙げるのは簡単。

その100を考える余裕があるなら、できることを1つ考えろ」。看護師である新潟県長岡市の「こぶし園」総施設長は、今は亡き前・総施設長の言葉をふり返る。滋賀県東近江市永源寺診療所所長の医師は、「生まれ育った場所で役割をもって活躍することを支援するためには、医療は必要最低限であればいい」と言う。埼玉県幸手市では、信頼関係のクラウド「が機能していて、地域で活動するグループ同士がつながり、皆がそこに情報を上げ、逆に情報が必要なときはそこから引き出しているという。その情報のやりとりを続けるだけで、より広い範囲で情報や関係性が共有される。石川県金沢市の佛子園僧侶は「歴史を改革するのは、実は認知症や障がいのある人など、社会的排除を受けやすい人た

ちかもしれない」と述べる。

著者は、それぞれの地域を訪ねた結果、施設はどうあるべきか、地域の活動団体とどうつながるべきかを考える必要があると述べ、「この機会を利用してケアとデザインとが融合するまちづくりを各地で進めることもできるだろうし、生活や人生が充実していると感じる人を増やすこともできるだろう。（中略）豊かな人生を実現させるために、ケアするまちをデザインするのである」と締め括っている。

鼎談だからこそ掴んだ真髄

地域包括ケアシステムは誰のためにあるのだろう、誰が中心になって構築すればよいのであろう。本書を読み終えたとき、そのものもや感が拭拭された。私は、看護師の立場で地域貢献すべく、看多機の機能に障がい者・児の預かりや健康増進活動も行なっているが、あたためて考えると、地域住民の方々もそれぞれの専門分野や役割を持って生活している。そして、「ケアするまち」を意識したまちづくりは、どの分野からでも始めることができ、その力は枚挙にいとまがない。

著者は、一人語りや対談では得られない「鼎談」から、それぞれの地域共生社会の真髄を掴んでいる。ぜひ、ケアの機能をもつ地域づくりを構築するために、ケアに関わるさまざまな領域の人々に一読していただきたいと願う。